

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	細 恵子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 児童の読書力を形成する「読書日記指導」の理論と実践			
論文審査担当者			
主 査	教授	難波	博孝
審査委員	教授	山元	隆春
審査委員	教授	朝倉	淳
審査委員	准教授	松本	仁志
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、読書力を形成することを目指した、小学校での読書活動を考案し、目的・内容・方法を明確に示した「指導プログラム」を開発することを目的としている。</p> <p>本研究の研究課題は以下の5点である。</p> <p>〔研究課題1〕 小学校・中学校段階における読書指導の現状を把握し、小学校における読書指導の課題と方向性を明確にする。</p> <p>〔研究課題2〕 読書指導に関する理論研究と調査研究及び歴史研究の成果と課題を明らかにした上で研究の視点を設定し、日本と海外の読書指導に関する先行実践を参照しつつ、読書指導理論の構築、「読書力」の検討を行う。</p> <p>〔研究課題3〕 先行研究の成果と課題を踏まえた読書指導の実践を自ら行うことで、目指すべき読書活動（「読書日記」）を考案する。</p> <p>〔研究課題4〕 小学校教育における読書日記指導の目的、内容、方法、指導の視点を明確にした上で、筆者の担当する学級で年間を通した読書日記指導を行い、身についた「読書力」を考察する。</p> <p>〔研究課題5〕 他校の教師と共に読書日記指導の学習会を月に一度程度実施し、指導法を教示し、共に実践交流を行う。複数の実践を基に、小学校低・中・高学年の「読書日記指導プログラム」を開発し、提案する。</p> <p>本論文は、10の章から構成されている。各章の概要は以下の通りである。</p> <p>序章においては、問題の所在と本研究の目的・方法を示している。第1章では、読書指導に関わる実践書の検討や教師によるアンケート調査を通して、小学校・中学校で行われている読書指導の現状を考察している。第2章では、「精読・多読」と「読書活動」に焦点を当て、読書指導理論を考察し、成果と課題を示している。それらを踏まえ、研究の視点①「読書力の明確化」、②「読書力の形成を目指す連続的・系統的な読書活動」、③「書くこと・話し合うことと結びついた指導法」、④「個に応じた指導法」を設定している。さらに、これらに適合する読書活動について海外と日本の先行実践を検討している。第3章では、先行研究における読書力の検討、読書力とPISA型読解力との関連についての検討により、多様な「読書力」を分類・構造化している。第4章では、リテラチャー・サークルと読書ノートの実践を第5学年に対して行い、成果と課題を明確にした上で、大村はまの中学生用の「読書生活の記録」を参照しながら、小学生用の「読書日記」を考案している。</p>			

第5章では、第3学年に対し、読書日記指導を行い、学級全体と個の変容（8人の変容）を示している。また、日本にまだ十分浸透していない「自分との関連づけ」の力を具体的に示している。第6章では、第3学年の児童に対して、第7章では、第1学年の児童に対して読書日記指導を行い、分析・考察を行っている。第8章では、他校の教師の、第5学年における読書日記指導の実践結果と筆者の3年間の実践結果から、「読書日記指導プログラム」を提案している。終章では、研究の目的に沿って成果をまとめ、今後の課題を明らかにしている。

本研究は、以下の3点で高く評価できる。

- (1) 「読書活動に対する意欲・態度」、「読書技術」、「読書習慣」を含めた幅広い読書力を育成する読書活動（読書日記）を考案したこと

本研究では、国語科だけでなく、日常においても、読書意欲・読書態度を育てるとともに、日常の読書生活に機能する読書技術（読書設計力・選書力・PISA型読解力・活用能力）を育成することのできる読書活動を考案している。児童が一人でも自分の読み方で読書を続け、自己と向き合っていくことを目指す、この読書活動は、従来、区別されてきた国語科「読むこと」の授業の「読解」と日常の「読書」を統合するものであり、さらに生涯にわたって読書を続け、自分の生き方を探り求める人間を育てることにつながっていくものである。

- (2) 読書指導に関する教師の意識に対するアンケート調査により明らかになった課題を解決する指導法を示したこと

アンケート調査により明らかになった読書指導の課題は、「個人差があること」「指導法の不明確さ」「時間の確保」である。1年目の実践（第3学年）では、「個人差」に対応する指導（教師が読書力に基づき、個に応じた朱書きを行うことや児童と対話を行うこと）により年間の個の変容を明らかにしている。また、2年目の実践（第3学年）では、朱書きと共に「読書日記による交流」という指導法により個と学級の読書力の広がりを実証している。3年目の実践（第1学年）では、日常の読書日記を国語科「読むこと」の単元に関連づけることにより、国語科の時間の中で読書指導ができる共に読書力の習得や定着が図られることを実証している。さらに、読書日記を通して児童の内面に迫ることができ、生徒指導にもつながることを実証している。このように、本研究で示した読書日記指導は、従来の読書指導の在り方を大きく改善するものである。

- (3) 3年間の筆者の実践と他校の教師の実践に基づいて、小学校第1・3・5学年の「読書日記指導プログラム」を開発したこと

読書日記指導の成果に基づき、「読書に関する目標」と「読書力」、「読書日記の指導方法」、「読書日記に書く内容」を示した、1年間用の読書日記指導プログラム（第1・3・5学年）を開発している。年間では、目標、読書力、指導方法、内容のそれぞれにおいて、国語科「読むこと」との関連を図りながら系統的、螺旋的な指導ができるものになっている。また、第1・3・5学年における系統性も図られている。多くの教師が実践できる方法を具体的に提案したものであり、実践を広めるために有効である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成27年2月13日